

研究課題	大学の文章表現教育と高大接続型カリキュラムの開発—学生の学習履歴の分析をふまえて
研究代表者	吉田 俊弘 (教育開発推進センター 教授)

## 1. 研究目的

本研究は、大学での初年次文章表現教育の充実を図るために、高等学校からの接続を効果的に行えるよう、高等学校での文章表現教育の取り組みを調査し、その内容をいかした大学初年次における文章表現教育のカリキュラムを作成、提言することを目的とする。具体的な研究の方法は以下のとおりである。

- ① 学生の文章表現教育にかかわる小論文、レポート、卒論の有無等の学習履歴を調査する。
- ② 学習履歴と現状の学生の文章表現能力の実態とを分析、類型化したタイプ別に、高等学校の教育についてヒアリングを行う。
- ③ ①②の結果を研究会やシンポジウムを開催することで高等学校の教員とともに検討する
- ④ ③の成果から効果的に高大で接続するための、初年次教育における文章表現教育のカリキュラムを考案する。

## 2. 研究方法

近年、大学における文章表現教育の充実がはかられるなかで、高大接続のあり方が模索されている。渡辺哲司他（2017）の知見は、高等学校の文章表現教育について方法や内容について数的に調査しており有益である。また、島田康行（2011～）の調査と報告は、高校生が国語において何を学んでいるかを明らかにしており、文章表現教育の高大接続を考えるうえで示唆に富む。東北大学高等教育開発推進センター(2014)も多角的な視点から報告をまとめており、成果があげられつつある。しかし、文章の構成や国語のなかで何がなされているのかの調査はあるが、教科の枠をこえた調査や、小論文やレポートなどの執筆経験、執筆字数、課題内容等文章表現教育の詳細を調査したものはない。現在、大学における文章表現教育がますます盛んになっており、学生の学習履歴や、高等学校での指導内容、方法をより明確に把握し、その内容に基づく初年次教育のカリキュラムについて改めて提言することが求められている。また、調査によって明らかになった高等学校の取り組みに基づき、大学での文章表現教育のカリキュラムを改めて見直す必要がある。さらに、分析と調査をもとに、様々な指導を受けた学生が、大学にスムーズに接続するための初年次文章表現教育のカリキュラムを考案する。

本研究の研究方法の特徴は、①高等学校の文章表現教育について、学習履歴と大学における文章表現能力の相関を明らかにするために調査を行う点である。また、①の結果、及び、高等学校における具体的な指導内容や方法を把握することをとおして、②スムーズに大学に接続するために、エビデンスに基づいた教育内容を作成する点である。さらに、大学の文章表現教育に関する様々な知見がすでに明らかにされているが、そこに③学習履歴という観点

をいれた新しい初年次文章表現教育のカリキュラムを提言する点である。

具体的研究方法は、以下のとおりである。

①：学生の文章表現教育にかかわる小論文、レポート、卒論の有無等の学習履歴を調査する。

大正大学における全学必修の文章表現教育において、「小論文」を執筆させているが、学生の成果物を見ると、学生がイメージする「小論文」の形や受けてきた指導が千差万別であること、また、文章表現教育を受けていない例もあることが学生の声としてあがっている。したがって、学生の学習履歴を調査しなければ、大学入学時の学生の前提を理解したうえでの初年次教育のカリキュラムを作ることができないと考え、本調査を実施する。

②：学習履歴と現状の学生の文章表現能力の実態とを分析、類型化したタイプ別に、高等学校の教育についてヒアリングを行う。

学生の学習履歴と現状の文章表現能力の実態とを分析、類型化したタイプ別に、高等学校を抽出し、実際に訪問して指導内容についてヒアリングを行う。その結果、高等学校での指導内容と学生の文章表現能力の相関関係を明らかにする。また、中高でのアクティブ・ラーニング等の普及にともない、現状の大学における初年次教育の方法が、中高までの経験と重複する可能性も否めない。したがって、高等学校での取り組みを明らかにすることをとおし、より深化した大学における初年次教育の方法を検討する必要があるため、本分析、ヒアリングを実施する。

③：①②の結果を研究会やシンポジウムを開催することで高等学校の教員とともに検討し、その成果を教育内容の開発にいかす。

④：③の成果から、効果的に高大で接続するための、初年次教育における文章表現教育のカリキュラムを考案する。

### 3. 研究成果と公表

#### ①研究成果

本研究の成果は、以下のとおりである。

- 1) 高等学校での文章表現教育についての学習履歴が明らかになるアンケートを作成し、2017年度、2018年度新生生に対し調査を実施した。
- 2) 1のアンケートを分析し、大正大学新生生の文章表現に関する学習履歴の傾向を把握した。具体的傾向は以下のとおりである。作成経験のある文字数については、400字～800字が62.4%と最も多く、1200字以上の文章を書いた経験のある学生は少数であった。文章を書いた科目は、国語が86.4%と最も多く、社会、総合的学習の時間、理科、HRの時間など多岐にわたっていた。また、文章を書いた後の振り返りは、教員からのコメント(63.9%)や添削(60.2%)が多かった。学生同士のコメントの経験があるのは、2017年度入学性が4%、2018年度入学生は18.5%であり、1年間で約14%増加した。この増加原因は、高校でのアクティブ・ラーニングの取り組みが表れていると考えられる。しかし、14%増加したとはいえ、8割以上の学生が学生同士のコメントを経験したことがないと回答した。チェック

リストやルーブリックを使用した経験がある学生は4.5%と、ほとんどいなかった。また、先行研究について調査した経験がある学生も5.5%であった。プレゼンテーションについては、約30%の学生が経験していないと回答した。

- 3) 1のアンケート分析より、高校時代に8000字以上の文章の作成経験のある学生に6人にインタビューを行った。その結果、東京都立葛飾総合高校と私立茗溪学園では、探究型学習をとおり、20000字以上の卒業論文を作成していたことが明らかになった。
- 4) 東京都立葛飾総合高校と私立茗溪学園を訪問し、具体的な指導内容についてインタビューを行った。
- 5) 1のアンケート分析により、高校時代に文章を全く書かなかった学生2名にインタビューを実施した。その結果、高校での文章表現教育の学習履歴がない学生は、大学でレポートを作成することに非常に不安を感じており、「学びの基礎技法 B」の授業でレポートの書き方を学ぶことで、その不安を解消していることが明らかになった。
- 6) 1のアンケート分析により、ボリュームゾーン(400字~800字の文章経験がある)に属する学生2名にインタビューを実施した。この学生たちは、高校で文章を書いた経験はあるものの、今まで書いてきた文章と大学でのレポートとは、種類が異なるものであると認識しており、「学びの基礎技法 B」の授業を受ける前はレポート作成に不安を感じていたことが分かった。「学びの基礎技法 B」を受講し、レポートには、客観的なデータや論理的な側面が必要であることを知り、レポートを書くことができるようになったと回答した。
- 7) 1~6で明らかになったことを参照し、「学びの基礎技法 B」授業カリキュラムに関して、SDGsを視座とした探究型学習を考案し、2018年度秋学期に実施した。2018年度「基礎技法 B-2」終了時に受講生に対しアンケート調査を行った。「基礎技法 B-2でSDGsに関わるレポートを作成したことにより、社会問題について、以前より意識するようになりましただか」の質問項目に対し、「社会問題について、以前より意識するようになった」と回答した学生は、89.4%であった。この結果からも、探究型学習をとおり、学生たちは社会に関して問題意識を抱き、2年次以降の学びに繋げている様子がうかがえる。
- 8) 1~6で明らかになったことは、2020年度から実施されるI類カリキュラム改革考案に寄与している。

## ②公表

### 【口頭発表】

- 1) 春日 美穂 由井恭子 吉田俊弘 近藤裕子  
初年次教育学会 於 酪農学園大学 2018年9月6日  
「学生の学習履歴に基づく初年次文章表現教育 ―学生へのアンケート調査結果の分析から―」
- 2) 春日美穂  
大正大学 第3回高大連携フォーラム

於 大正大学 2019年3月16日

「高大接続の文章表現教育をどのようにつくるか」

第一部 研究・実践報告「高校から大学への文章教育」

「高校における文章表現教育はどのように行われているか」

3) 由井恭子

大正大学 第3回高大連携フォーラム

於 大正大学 2019年3月16日

「高大接続の文章表現教育をどのようにつくるか」

第二部 研究・実践報告「高校から大学への文章教育」

「高校教育からの接続を大学はどのように受け止めるか」

—大学における文章表現教育の実践

4) 由井恭子 春日美穂 吉田俊弘 近藤裕子

大学研究フォーラム ポスター発表 於 京都大学 2019年3月23日

「文章表現教育の学習履歴が大学生に与える影響 —大正大学における学習履歴調査、学生へのインタビューをとおして—」

5) 近藤裕子

大学研究フォーラム ポスター発表 於 京都大学 2019年3月23日

「PBL型初年次ライティング授業 —問い立てから知識再構造化へ向けて—」

【論文】

1) 由井恭子、吉田俊弘、近藤裕子、春日美穂、君島菜菜、中村公子、高野空太

「文章表現教育における TA(ティーチング・アシスタント)の養成と活用—大正大学共通科目

「学びの基礎技法 B」の実践をとおして—」『大正大学教育開発推進センター年報』第3号 2019年3月

2) 春日美穂、近藤裕子、由井恭子、吉田俊弘

「文章表現教育における TA(ティーチング・アシスタント)の養成と活用—大正大学共通科目

「学びの基礎技法 B」の実践をとおして—」『大正大学教育開発推進センター年報』第3号 2019年3月

3) 近藤裕子、春日美穂、由井恭子

「初年次文章表現教育に向けての文章作成経験を問う予備調査 —高大接続の観点から—」

『大正大学教育開発推進センター年報』第3号 2019年3月